

目覚める巨象インド

# 「製造業」「内需」真の大国へ

抜群の実績を誇るモディ新首相が就任したインド。改革期待は高まり続け、国民の熱狂が町中にあふれる。悠久の昔から変わらないガンジスの流れに見守られながら、この国には確かな変化が起ころうとしている。

## 計画経済とは決別 熱狂呼ぶ改革策

### 「世界の輸出拠点」へインフラ整備

「皆さん、国家計画委員会はもう廃止します。この国を引っ張る新しい考え方を持った機関に置き換えます」。15日、デリーの旧市街にあるムガル帝国時代の史跡「レッド・フォート」。会場を埋め尽くした聴衆を前に、赤いターバンを頭に巻いて熱弁をふるうモディ首相の姿があった。

68回目の独立記念日を迎えたこの日の演説でモディ氏がぶち上げたのは、「過去」との決別だ。初代ネル首相の時代から60年以上続く計画委の解体。旧ソ連のように独立後のインドでは同委が策定する5カ年計画が経済運営に影響を及ぼしてきた。だが、もはや計画経済の時代ではない。「机上の空論をやめる政治の意志の表れだ」。企業の進出を支援するインド・ビジネス・センターの島田卓社長が解説する。

国土や人口の巨大さに「カースト」という独特な身分制度、そして多様な宗教の混在……。こんな国柄ゆえに地域政党が乱立し、インドでは決められない政治が続いてきた。だが30年ぶりの単独過半数政権の誕生で同国には今、熱風が吹いている。激震が走っているのは権威的でとにかく動きの遅い、汚職まみれの官僚機構も同じ。誰もが

感じ取っているのは「変革」の機運だ。15日にモディ氏が打ち出した改革策は改めて国民の熱狂を呼び起こした。

株式市場も好感し、SENSEX指数は18日に7月下旬以来となる最高値を更新。「政府に対する市場の評価は恐ろしいほど高い」。UBSのチャオチャリア氏は顧客向けのメモでこのところの市場の高揚をこう伝えている。

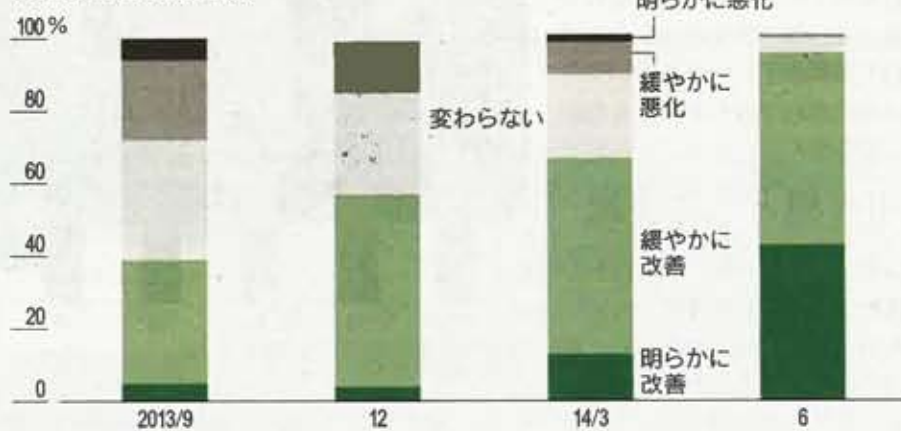
「大転換」に向けた指針は「脱計画経済」にとどまらない。首相は演説でインドを「世界の製造・輸出拠点」にする構想もぶち上げた。「プラスチックでも車でもサテライトでも農産物でもいい。インドに来て、作ってください」。海外企業にこう呼びかける一方で、国民には覚悟を求めた。「メード・イン・インドアが世界に行き渡るには、欠陥製品ゼロ、そして環境への影響もゼロでなければなりません」

もの作りにこだわるのには理由がある。もたつく雇用で経済成長、そして貿易赤字といったインドの弱点を克服するのに役立つのが製造業の育成と考えるからだ。国内総生産(GDP)に対する製造業の比率は15%。一方、ITやコールセンターなどのサービス産業は約6割に達する。「製造業を飛ば



独立記念日の演説でモディ氏は「過去」との決別をぶち上げた—A P

インドの企業経営者のインド経済への期待感は急速に高まっている(今後6カ月間の経済状況)



マッキンゼー・アンド・カンパニー

してサービス産業化が進む特異な経済発展をしてきたが、雇用の吸収力は弱かった」。コタック・マヒンドラ銀行のパン・チーフエコノミストが言う。

頻繁な停電にひどい道路事情、さらには厳格な雇用規制に複雑な税制や土地収用の難しさ……。いくつもある製造業が育たない障害をモディ政権は一つ一つ取り除こうとしている。その最たる例がデリーとムンバイを結ぶ貨物専用鉄道を敷設し、周辺に工業団地や物流基地、住居、商業施設などを整備

する「DMICプロジェクト」だ。「新政権の誕生でいよいよ拍車がかかる」。DMIC開発公社の幹部が明かす。

新政権には企業も期待を寄せている。それを端的に示すのが経営幹部を対象にしたマッキンゼー・アンド・カンパニーの調査だ。6月調査では、インド経済が「今後6カ月間で改善する」と答えた割合が実に全体の96%に上った。昨年9月の39%から急上昇が続いている。「インドの時代」の幕開けに、内外の企業やマネーが沸いている。

#### 「モディノミクス」の主要政策

インフラ整備	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 高速鉄道網の敷設、空港の近代化</li> <li>● 再生可能エネルギーや原子力発電の拡充</li> <li>● 全国に国際標準クラスの100都市を開発</li> <li>● 農業関連インフラの整備</li> <li>● ガンジス川の浄化</li> </ul>
インフレの抑制	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 買い占めや闇取引に対応する特別裁判所の導入</li> <li>● 価格安定基金の創設</li> <li>● 農産物物流の効率化</li> </ul>
国内経済の回復・雇用創出	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 外国からの投資呼び込み</li> <li>● 税制の簡素化、物品サービス税(GST)の導入</li> </ul>
財政改革	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 燃料補助金の削減</li> <li>● 公営企業改革</li> </ul>
行政改革	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 汚職防止のための特別部隊の設置</li> <li>● 電子的手続きの積極導入</li> </ul>

## アベノミクスと相似形

### 「理想のパートナー」との声も

「アベノミクスとモディノミクスってかなり似ている」。こう語るのは野村インドのシャルマ最高経営責任者(CEO)だ。「第1の矢」に当たる金融政策こそ日本が「脱デフレ」、インドは「脱インフレ」と異なるが、財政出動をもって経済の底上げを図る「第2の矢」はまさにそっくり。道路や鉄道などインフラ整備に力を入れるモディ首相に対し、安倍晋三首相も国土強靱(きょうじん)化計画を打ち出し、東京五輪を見据えて公共投資を進める構えだ。

「第3の矢」である成長戦略も外

資をうまく使うという意味で根っこは同じだ。安倍首相は昨秋に米国で「バイ・マイ・アベノミクス」と語り、対日投資を呼びかけた。モディ首相も外資誘致を通して世界の製造業拠点となることを標榜している。

技術と資本を必要とするインドと、労働力と市場を求める日本。両国は「これ以上ない理想的な組み合わせ」という声も少なくない。9月1日の日印首脳会談では改革を唱えて世界の脚光を浴びるリーダー2人が固い握手を交わすことで、両国の絆が広がってないほど強まる見通した。